

月刊

2012

4
月号

みんぱく



特集

今和次郎の

考現学と

その遺伝子たち

考現学と民博 久保正敏

今和次郎から梅棹忠夫へ 川添登

民博民家模型の意義 真島俊一

考現学からの旅立ち―根にある暮らしを伝えた大村しげ 横川公子

モンゴルを考現学する 堀田あゆみ

「残念ですが、胃がんです」

病院で精密検査の結果を言いわれたとき、東京の患者さんならたいがい黙って下を向くという。そのあと二人の間にしばらく沈黙が続く、先生はその沈黙をじっと待つという。

しかし、大阪の患者さんはちよつと違うらしい。

「残念ですが、胃がんです」

「ええ？ 胃がんでっか？ ……そこで、なんとかかなりまへんやろか」

「……」

「なんともならんわなあ。……言うてもしやあないわなあ……」

「まあ、ねえ」

「しかし、胃がんとは思わなんだなあ。……そらまあ、自分の体にできてしもたんやから……センチに言つてもほかの病氣と換えてもらうわけに行かんのは分かってますけど……それにしても、えらいもんができましたなあ……」

「まあ、ねえ」

先生はとりあえず「まあ、ねえ」しか言つてないのだが、患者が自分でおねおね言つて自分で気持ちなだめて治療の話し合いはそのあとから始まるよつだ。

「大阪へ行ったら通天閣にのぼりたい」と言つた知人に対し、とりあえず話を続かせるつもりで「あんなんやめとき。ただの汚い展望台や」と言つたら、相手が黙りこんでしまったという



「なんとかかなりまへんやろか」

おのえけいすけ
尾上圭介

プロフィール
1947年大阪市に生まれる。東京大学大学院人文社会系研究科教授(3月まで)。博士(文学)。専門は日本語学、特に文法論。それとは別に、大阪のことばと文化とお笑いに関心が深く、その方面の著書として『大阪ことば学』(創元社、岩波現代文庫)がある。日本笑い学会理事。

話を讀んだことがある。東大近くの古い古いカレー屋でライスに白い石が入っていて、レジの時に「前歯がちよつと欠けたよ」と言つたら、店番のおばさんがこちらの目も見ないで黙り通したこともある。

相手の意外なことばを聞いたり、都合の悪い状況に直面したとき、なんなとことばを繰り出して、話題の事実と自分との間に何とか折り合いをつけたり、そうすることによつて相手と自分を含むその場の空気を維持したりするというのは大阪という都市の高度な芸当である。そういう文化と無縁な人は、ばつが悪そうに、あるいは不機嫌そうに、ただ黙つてつむくことしかできない。相手の言語的対応能力が当てにできない土地では、そういう気まずさを避けるためには、あらかじめこちらが発言をセーブするしかない。

ものを言うことでその場をなんとか救う。相手も自分も肩がこらんように、なんとか工夫して話をするのでなければ、ものを言う資格がない。とりたてて意識するまでもなく自然の身のこなしとしてそういう感覚が身についている人たちがあり、そのやりとりの上に成り立っている社会が、一方ではある。

ああ、大阪で暮したい。……なんとかかなりまへんやろか。……なんともならんわなあ。

月刊
みんぱく
4月号目次

- | | | | |
|----|---------------------------------------|----|-------------------------------------------------|
| 1 | エッセイ 千字文
「なんとかかなりまへんやろか」 尾上圭介 | 14 | 地球ミュージアム紀行
動物園に動物園を見に行く
新竹市立動物園
木下直之 |
| 2 | 特集 今和次郎の考現学と
その遺伝子たち | 16 | 連載リレー 知の収蔵庫
ボクシングの文化論 3の1
ボックス!
樫永 真佐夫 |
| 2 | 考現学と民博 久保 正敏 | 18 | 多文化をあきなつ
買い物で世界とコンシャスにつながる
人見 友子 |
| 4 | 今和次郎から梅棹忠夫へ 川添 登 | 20 | 異間逸聞
「幸せの国」のあやうさ
南 真木人 |
| 6 | 民博民家模型の意義 真島 俊一 | 21 | みんぱく私の逸品
砥石入
近藤 雅樹 |
| 8 | 考現学からの旅立ち
——根にある暮らしを伝えた大村しげ 横川 公子 | 22 | フィールドで考える
被災後を生きる
竹沢 尚一郎 |
| 9 | モンゴルを考現学する 堀田 あゆみ | 24 | 次号予告・編集後記 |
| 10 | 研究フォーラム
SPレコードを通して声の歴史をさぐる
劉 麟玉 | | |
| 12 | みんぱく Information | | |

今和次郎の 考現学と その遺伝子たち

考現学と民博

久保正敏 民博文化資源研究センター

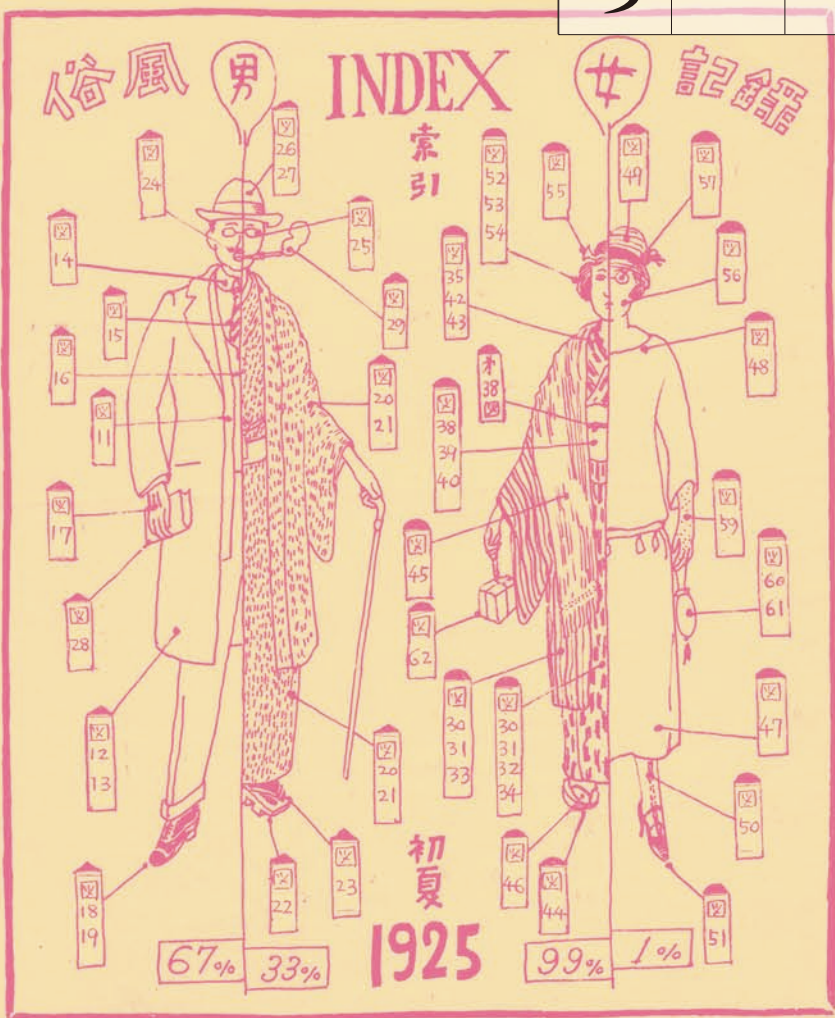
青森県弘前出身の今和次郎は、柳田國男らの作った「郷土会」、その後の「白茅会」に参加するなかで民家研究に入り、また郷土会の縁で渋沢敬三とも知遇をえる。当初は民俗学に近く農村に注目していた今和次郎だったが、関東大震災を機に、生活が大きく変化していく都市生活にも目を向けるようになり、世相・

風俗を野外観察、記録することで、庶民の生活文化の変化をとらえる考現学を創始した。東京美術学校図按科を卒業し建築家・デザイナーでもあった今和次郎の残したスケッチやノートなどは、庶民生活への暖かい眼差しが窺える解説、数量化とグラフ化など、魅力的な図的表現に特徴がある。世相や風俗の観察は、流行や服装研究にも広がっていく。庶民が暮らしを作り出していくさまとそこにある健康的な美に寄り添うという今和次郎の姿勢は戦後も一貫しており、労働と再生産だけではない、休養や娯楽、教養そのものをも生活研究の対象とする、生活学を説くにいたる。これについては次の川添登氏の稿に詳しい。

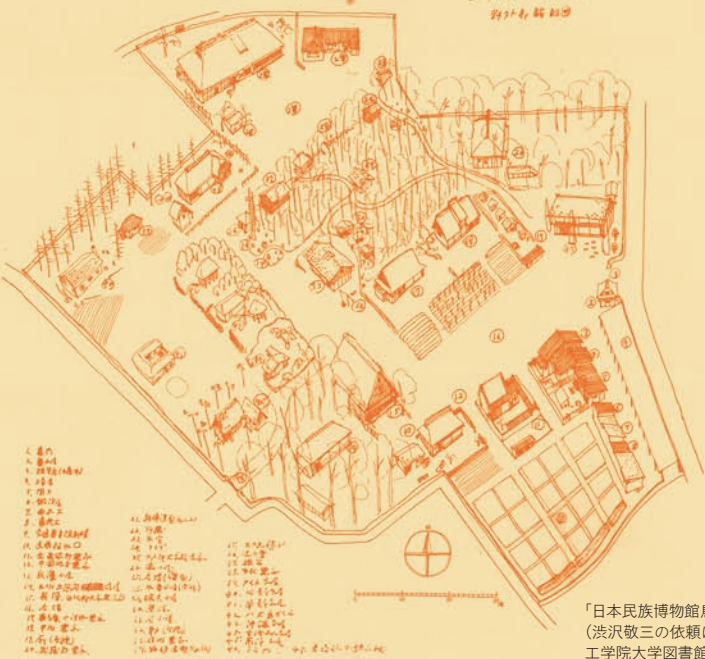
生活学の源流のひとつとなった考現学だが、その手法と対象は民族学とよく似ており、梅棹忠夫もモンゴルなど海外調査で考現学に触発された記録を数多く残している。民博の研究者にも考現学の遺伝子は引き継がれ、やや遠方から観察する考現学比べ、モノや人により接近したモノ調査やインタビュー調査を組み合わせた文化研究、映像による記録、データベースによる分析などへと展開させてきた。それは、モノと人から文化を理解しようとする、民族学の原点そのものでもある。

昨年一〇月から本年三月にかけて青森県立美術館およびパナソニック汐留ミュージアムで開催された「今和次郎 採集講義」展は、

中央：『東京銀座街風俗記録』より「統計図索引」
(今和次郎、1925年 工学院大学図書館所蔵)
左右：青森県立美術館・パナソニック汐留ミュージアムで開催の「今和次郎 採集講義」展のために制作された立体模型
(制作：NECT design (CHONO)、2011年)



「銀座カフェの服装採集」
『アサヒグラフ』1926年11月号
(今和次郎・吉田謙吉、1926年)
工学院大学図書館所蔵



「日本民族博物館鳥瞰図」
(渋沢敬三の依頼により今和次郎が1936年頃作画)
工学院大学図書館所蔵

特別展 今和次郎 採集講義——考現学の今
会期：二〇二二年四月二六日(木)～六月一九日(火)
場所：国立民族学博物館 特別展示館

今和次郎から梅棹忠夫へ

川添登 建築評論家

恩師、今和次郎

建築評論を中心に活動してきたわたしには、恩師と呼べる学問上の先生が三人いるが、その一人が生活学を教わった今和次郎先生だ。戦後、児童文化に興味をもつわたしは、早稲田大学専門部工学科を卒業後に児童施設を勉強しようと文学部哲学科に編入したが、やはり建築学に戻ろうと早稲田大学第二理工学部建築学科に編入、昼間は暇なので今和次郎研究室の助手となった。そして今先生らが作った生活研究会の幹事を引き受けた縁で、雑誌『新建築』の編集に携わるようになり、それが建築評論の道につながっていく。

今先生は、柳田國男門下で民家研究に先鞭をつけ、さらに、柳田國男とともに「郷土会」を開いた、当時の農商務省幹部で農政の神様とよばれた石黒忠篤の支援をえながら、朝鮮半島を含む日本全土の農村調査をおこない、スケッチによる徹底的な記録手法に磨きをかけた。当時の農村は伝統を、都市は文化を担っていたが、この区分が崩れ去った一九三三年の関東大震災を機に、今先生は都市生活に興味を移す。その調査方法として編み出したのが考現学であった。柳田の民俗学は、都会者の目で消えつつある過去に美を見るのに対し、都会の生活のなかで成長する健康な美に関心を移し将来を読み取ろうとするのが考現学であり、柳田と袂を分かつことになる。今先生は将来へ影響をもたらす服装史や流行研究にも先鞭をつけ、大衆が単なる軍事力・労働力の提供者と見なされた戦前において、大衆により健康

的でより合理的な生活をもたらす生活改善運動に乗り出す。それは戦後にも引き継がれていく。

考現学から生活学へ

戦後、機能主義的な生活改善運動が盛んとなったが、それはサラリーマンにしか適用できないし、近代的・合理的生活が必ずしもよりよい生活パターンではなく、家庭労働のなかに文学的な喜びもある、と批判した今先生は、さまざまな職業の人びとの生活全体をバランス良く見てそこにある矛盾の解消をねらう生活学を提唱した。今先生の助手だったわたしは大切なことを教多く教わったが、わたし自身、忙しくなったこともあり、今先生の研究室に居たのはおよそ半年、今先生の助手らしい仕事のできたのは、二〇年後、一九七二年から刊行が始まる『今和次郎集』（下メス出版）の編集であった。

大阪万博の跡人利用

高度経済成長期に入ったころ、独立した建築評論家になっていたわたしの書いたものを、もつともはやく評価してくれたのは、桑原武夫、梅棹忠夫、多田道太郎など、京都大学人文科学研究所の方々だった。そして梅棹忠夫に呼ばれて一緒に『桂離宮』（淡交新社、一九六一）を書くため訪れた京都岡崎の宿泊先に、梅棹忠夫、林屋辰三郎、多田道太郎、加藤秀俊が訪ねてこられたのが、この方々ときあうきつかけだった。

大阪万博の準備がはじまると、サブ・テーマ専門調査委員に選ばれたわたしは新幹線で大阪に

かよった。大阪万博では、岡本太郎展示プロデューサーのもと、小松左京とわたしがサブ・プロデューサーとなり、地下テーマ館を小松が、空中テーマ館をわたしが、それぞれ担当した。

万博終了後、せっかくだきた人間関係をなくすのはもったいないと、加藤秀俊、小松左京、栄久庵憲司、菊竹清訓らと、京都に調査研究企画会社シー・ディー・アイ（C D I）を一九七〇年一〇月に設立した。他方、万博テーマ館の実務と太陽の塔の内部や地下テーマ館のデザインを担当した小野一、千葉一彦、幡野豊治郎らは、トータルメディア開発研究所を万博閉幕直後に設立、栄久庵は役員に、わたしは最高顧問に迎えられた。

それより前、民博の設立運動が日本民族学会によって始められたころ、わたしは、まるで梅棹忠夫の東京駐在私設秘書のような役をさせられていた。そのうち、大阪万博の跡地に民博が作られることになり、文部省に設けられた創設準備会議協力者にわたしも加えられ、やがて黒川紀章が建築設計、わたしが展示プロデューサーにあたる「展示に関する主たる助言者」、栗津潔が「展示に関する助言者」、小松左京が展示小委員長、勝井三雄がシンボル・マークや広報のデザイン、トータルメディアが展示の業務、それぞれを担当することになった。つまり、万博テーマ館のチームの再現である。梅棹忠夫は、これを跡地利用になぞらえて跡人利用とよんだ。一九八二年には日本展示学会が設立され、梅棹忠夫が会長に、わたしは学会誌の編集委員長になった。

考現学の復興

じつは、高度経済成長期に入ったころ、今先生

は、考現学の方法は捨てた、いまでは週刊誌がそれをやっている、といわれた。すでにわたしの親友であった梅棹忠夫にこれを伝えたところ、彼は猛然と反対し、週刊誌の低俗さに対し考現学は崇高な精神に満ちており、文化人類学の調査に使える、と断言した。そして、『今和次郎集』の刊行が始まったのを機に、梅棹は考現学復興の旗を掲げ、九州芸術工科大学で考現学の講義をおこなった。それを聞いた今先生は大変に喜ばれて考現学は梅棹忠夫に譲るとまでいわれた。しかし、梅棹は、なぜ考現学が中断したかを問題にすべきと指摘したので、わたしは梅棹と話し合い、今先生の生活学は考現学を方法論のひとつとする学問であるとして、今先生を会長に、日本生活学会を一九七二年に設立し、わたしが理事長となった。その設立総会で、わたしが今先生と梅棹を初めて引き合わせたものの、互いを意識してか、あまり話しなかつたのを覚えている。

発起人の一人、宮本常一先生とはすでに別の対談などを通して知り合っていたが、宮本先生が教えていた武蔵野美術大学の卒業生たちによる民家調査展覧会を見て、その詳細で膨大な調査記録に驚いた。そこで出会ったのが真島俊一である。民博の開館に備えた展示プロデューサー役をしていたわたしは、彼に日本展示の民家模型製作のための調査をしてもらった。彼の『南佐渡の漁村と漁業』は、一番ヶ瀬康子とともに、一九七五年に日本生活学会の第一回今和次郎賞を受賞している。

こうして振り返ると、今先生と梅棹忠夫や民博とのあいだには深いつながりがあることに、あらためて気づくのである。

梅棹忠夫(左)との対談(『月刊みんぱく』1978年2月号「館長対談」)



今和次郎(右)との対談(筑摩書房『展望』1966年3月号)



民博民家模型の意義

真島俊一 TEM研究所所長

縮尺一〇分の一の意味

川添登先生の研究所に、わたしの母校武蔵野美術大学の相沢韶男と一緒に呼び出されたのは、川添先生が民博の展示プロデューサー役を引き受けたころのこと。日本展示で民家模型を展示することになったが、そのアイデアを出せという。卒業後、すでに調査集団TEMを作って民家調査をおこなっていたわたしは、模型は一〇分の一サイズであるべし、という理念をもっていたが、それは、学生時代にさかのぼる。

和船の研究を始めようと宮本常一先生に相談したところ、自分は造船技術に詳しくないので、当時、水産庁の主任技官だった石井謙治先生を紹介され、話をうかがいに行った。そこで次のような講義を受けた。

伝統的に船大工や宮大工が神社に奉納する模型は一〇分の一である。施工のための設計図にあたる大工の手板もこの縮尺が基本。なぜなら、実材料とそれに応じた技術、たとえば板の曲げや材料の組み合わせなどを検討すると、縮小する限界がこのサイズで、それよ

り小さいと、本物とは異なる玩具的な技術になってしまう。実材料に応じた技術を現場に伝え、また技術を伝承するための模型は、一〇分の一以上でないためだ、と石井先生は二、三時間も力説された。

これがわたしの頭にあっただので、川添先生にも力説し、梅棹忠夫先生に提案していただくようにと、川添先生に頼んだのである。

現状模型の大議論

展示の模型は、生活を示す学術資料である、という意識は民博の先生方も共有していたので、この案がとおって縮尺一〇分の一でいくことになったが、それがじつは大変なこと、たとえば合掌造りわきの杉木立をこの縮尺で再現すると展示場の天井を突き破る、と先生方が気づくのはもつと後である。

また、調査時点の現状再現でいかに、学術検証や時代考証に時間がかかりすぎる。そこで、民博の展示を企画する委員会で、現状模型を採用してもらおうと提案した。ここで、大議論

が始まる。幾人かの民博の先生からは、合掌造りが民宿になっているのは言語道断、養蚕農家の姿に復元しないとだめだという意見も。午前中から始まった会議は夕刻まで続き、最後に梅棹先生が次のような断を下された。

生活状況ありのままをタイムカプセルとして再現するのが民博の使命だ、石油物質文化による生活変化が進む現状を切り取って後世の学術資料として残そう、復元模型は建築系の博物館に任せればよいではないか、と議論をまとめた。この梅棹先生の考えは、今和次郎の考現学の思想とまったく同じなのだ。

こうして日本を代表するとして選ばれた四棟の調査が始まり、開館までの短期間に、若い仲間たち五〇名余が全国に散った。建物のみならず生活状況を再現するため家財道具すべて、段ボール箱も破れ障子も、ありのままにスケッチ、採寸、写真撮影と、記録し設計仕様にしていくのだから大変だ。いわば、学術的遺留品捜査のような作業を進めていく過程で、民家の住人たちと深いつながりができ、いまでも年賀状のやりとりをしている。

模型の背後にある膨大な調査記録資料

わたしたちの調査記録は膨大だ。一九七四年当時の各民家と民具の考現学的「一切しらべ」に他ならない。これらは調査設計図書であるから、わたし

の研究所にあるが、視点を変えれば民博にもあつてしかるべき学術資料だろう。この記録に基づいて模型を製作したのは、島田澄也氏率いるサンクアールという映画特殊美術の名人集団だが、東宝スタジオで模型製作をしている隣のスタジオでは昼メロを撮影中、主演日色とも多の「おやめになって」という声が聞こえてくると皆も模型製作の手を止めてしまった、というの懐かしい思い出だ。

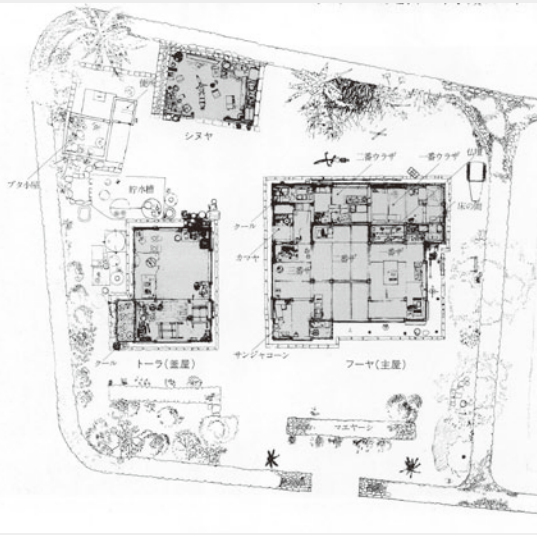
民博開館後、多くの博物館でも模型展示が導入されたが、縮尺理論は継承されていないし、ウソの入ったものが多いのは残念だ。民博民家模型は、これはわたしの家だと住人がいえるほどに生活を再現してある。病気の家人が寝ている、寝室がある等の理由から戸や障子を閉めている模型もあるが、ほかほとんど再現している。

今和次郎が考現学を創始したのは関東大震災後、生活が大きく変わる時期だった。民家を調査した一九七四年も、高度経済成長や石油化学文明の浸透によって生活が大きく変わろうとする時期。家族のあり方、住まい方の原風景として記録された調査の時期から家族の解体が進み、各民家は大きく変わり、いまや解体されたものもある。生活の変化、そしてその背景を考える学術資料としての民家模型の意義は、考現学の神髄そのものといえよう。

スケッチから起こした二棟造りの小底朝泉家の立体図(右)と間取り(下) TEM研究所(『季刊民族学』2号/1977年12月発行「二棟造りの間取りと使い方」より)



これら図面はマイクロ・フィルム化されているほか、各民家にある一切の家財道具一点ごとのスケッチと採寸記録からなる民具台帳、写真など膨大な資料がTEM研究所に残されている。いずれも、1974年当時の極めて貴重な生活文化の学術調査記録である。



合掌造り模型の搬入作業 (1976年4月)

考現学からの旅立ち——根にある暮らしを伝えた大村しげ

横川 公子 武庫川女子大学教授

温もりを伝えるコレクション

民博所蔵大村しげコレクションは、物書きで料理研究家の大村しげ（本名 大村重子、一九一八—一九九九）が、京都市中京区の姉小路の住まいに残した、ほぼすべてのモノで構成されている。コレクションは、民博の共同研究プロジェクトの調査によって、一万四五二件、四万五二八点にのぼることが明らかにしている。

コレクションは、故人の遺志により民博に寄贈された。彼女は、姉小路の借家に、女子専門学校に通い始めた二六歳（一九三五年）のころから八〇歳で亡くなる一九九九年まで住み続けた。いまでも残されているこの家は、本能寺の借家で、昭和初年代に建てられた五軒町家の一角にある。昭和二三（一九三八）年には、祇園の仕出し屋「魚金」を営んだ父母も合流した。そのため、コレクションには、しげの祖母のモノ少々と父母の生活財、あらためてこの場所で開店した魚屋「魚金」の商売上の道具類が蓄積されしげと家族の暮らしの温もりを伝えている。

民族誌として暮らしを留める

庶民の暮らしで使われるモノは、とくべつな宝物でも美術品でもない。しかし、庶民の暮らしを如実に語る証拠となるので、後の世の学者さんの参考のために残したい。こうしたい思いから、しげの生活用品は大切に手元に保管され、民博は、それらを二〇世紀の暮らしを証明するタイムカプセルとして受け入れた。

しげは、モノを意図的に残しただけでなく、四〇年間にわたって、台所から発信する物書



通り庭の奥にある台所で、おぼんざいをつくる大村しげ

きの視座から、「根にある暮らしを伝えるのは、知っているものの役目だと思ふ」と、細やかな文章を綴り続けた。足元の暮らしの現場を、民族誌ともいえる独自の文章とともに提案したともいえるのか。

モノは、置き場所や収納用具だけが明記された段ボール箱に入られて民博に運び込まれた。調査は、モノから炙りだされる暮らしの再現を目指して、写真撮影による外観の記録のみならず、一つひとつ手に取って観察され、「名称、用途、材質、法量、置き場所、使用状況、使用年代、使用痕……」が読み取られ、丹念に記録された。

生活を再現するまなざし

今和次郎は、極めて主観的で個人的な興味によりながら、大衆の暮らしの現場をスケッチすることによって観察し、独自の手法で考えようとした。そのようにして主観の多様性や、変化しつつあるモノと人間との関係性を切り取り、現代生活の諸断面を生き生きと再現しようとした。

一方、大村しげコレクションの検討は、現場を離れておこなわれた。モノは、前に述べたように事細かに悉皆調査されて文字で記録された。そこには観察者による視座ばかりでなく、元の所有者によるモノへの思いや記憶、情緒的な価値評価も反映されている。モノ自体の客観的調査と同時に、大村しげという人間がそのモノをどう使い、どのように考えたかについても加味されたのである。このようにすることで、しげが住んだ京都という町や時代の表情をも再現できる可能性が出てきたのだ。

モンゴルの考現学する

堀田 あゆみ 総合研究大学院大学博士後期課程

考現学の可能性

二〇〇九年夏、モンゴル国の首都ウランバートル市において若手モンゴル研究者の国際学術会議が開かれた。わたしは、「モンゴルにおけるモデルノロヂオ」という題目で発表し、今和次郎の考現学を紹介した。（モデルノロヂオとは、今和次郎が「考現学」をエスプレント風に命名し、著書の表題としたもの）

今和次郎は「現代人の生活ぶり」を後世に伝えるために、個人の「所有している品物全部」を徹底的に記録するという方法を実践した。そうした調査の集積から社会全体の慣習や風俗の共通性、また個々人の差異性が明らかにできると考えたのである。一九二五年の「下宿住み学生持ち物調べ」および翌年の「新家庭の品物調査」には、部屋の間取りや家具配置、細々とした調度品から衣類、携帯品にいたるまで、すべての所持品の観察記録が図示されている。

市場価値のあるモノや伝統工芸品といった特定のモノではなく、日常のどこにもあるモノすべてを記録の対象としていることが、考現学の特徴である。このような手法を、現代モンゴルの物質文化研究に応用すれば、これまで注目されてこなかった人とモノとの関係性に迫れるのではないか、というのがわたしの提案であった。

遊牧民「家庭の品物調査」

遊牧民の一家に協力を仰ぎ、実際に生活のなかにあるモノの悉皆調査をおこなった。考現学を参考に、すべてのモノの数、種類、所



筆者のフィールド・ノート。聞き取りの際にスケッチを示すと、写真のときより話がはずむ

在を記録した。そのうえで、特にわたしが重視したのは、それらのモノの一点一点について、いつ、どこで、誰から、どのように入手したのか、という来歴を聞き取ることであった。

モノの来歴は、家族におこった出来事や、親族、友人との思い出と絡めて語られる。それゆえ、一家の歴史、親族関係、交友範囲がそこから明らかになった。

また、一家の所有物でないモノがあつたり、一家の所有物のはずが他家にあつたりという状況が観察された。柄杓、保温瓶、雑巾、靴墨、ハサミ等が前者であり、ナイフ、手袋、まな板、櫛、ハサミ等が後者である。貸借によってモノが所有者の手元を離れ、他の家々とのあいだを頻繁に移動していることがわかった。ハサミのように、他家に貸し出した後で必要が生じ、別の家から借用するという例も見られた。

このような遊牧民の「生活ぶり」からは、所有者がモノを占有することより、モノを融通し合うことを優先していることがうかがえる。相互扶助の原則が貫かれている草原生活では、必要性の主張が所有権に勝つこともしばしばである。必ずしも、モノがないから借りるというわけではなく、「より性能が良い」、「自分のモノは温存したい」といった理由によることもある。どのような事情であれ、実際にモノが移動し、貸借できる関係にあると相互が確認し合うことが重要になる。

人間関係の維持や構築を図るための、媒介としてのモノの役割が、悉皆・来歴調査から浮かび上がってきたのである。



SPレコードを通して声の歴史をさぐる

リュウ リンギョク
劉 麟玉

奈良教育大学准教授

大衆の娯楽には、その時々世相、その土地に暮らす人びとの社会観が反映されている。この共同研究では特に「音楽」に着目し、レコードから発せられる当時の「声」をたよりに、歴史や文化の相互交流をさぐりたい。

社交ダンスの時代

二〇〇三年に、台湾では『跳舞時代』というドキュメンタリーが公共テレビ台（公共放送局）によって制作・公開され、話題となった。それは、SPレコードや音楽を通して一九三〇年代の台湾文化と社会状況を描いたものであった。第二次世界大戦後から一九八〇年代までに生まれた新しい世代の台湾人にとっては、祖父母や両親の断片的な思い出によって創られた漠然とした日本時代の台湾像が、『跳舞時代』を通じて、当時の台湾の現実の姿に変わった瞬間であったと考えられる。『跳舞時代』に用いられた幾つかの場面は当時撮影されたものであり、わたしたちの想像を超えた当時の生活ぶりがリアルに描かれていたからである。

そこには手を繋ぐ恋人の姿、タバコを吸う女性、音楽に合わせて踊る若者が映し出されている。その背景に流れる音楽は、当時ヒットした数曲の流行歌である。じつは『跳舞時代』という題名も当時の流行歌の曲名からきている。「跳舞時代（レコード番号802731B）」は一九三三年に日本コロムビアから発売され、それは作曲家陳君玉、作詞者鄧雨賢という名コンビの手によるもので、吹き込みは日本コロムビアの専属歌手「純純」がおこなっている。

SPレコードに見られる近代の要素

「跳舞時代」をひとつの事例として挙げてみよう。一番の歌詞に次のように書かれている。「和訳」わたしたちは文明の女性である。東西南北に自由に行き来し、束縛されない。（中略）文明の時代にはオープンな社交が大事であることだけ知っている。男女のカップルが列になり、トロットを踊ることはわたしたちの一番の楽しみである。二番以降の歌詞にも「自由」「快樂主義的」などのことが多数盛り込まれている。従来の漢民族の伝統社会では、女性が古い道徳的価値観に束縛され、父母が決めた相手と結婚したり、未婚の女性は男性と付き合うことが禁止されていたりと保守的であった。この歌に描かれた自由奔放に人生を生きる姿やアメリカのフォックストロットを夢中で踊る姿は、伝統的な社会規範への挑戦であり、一種の思想的近代化といえよう。また、音楽の部分でも、伴奏は西洋楽器を用いたコロムビア管弦楽団によるもので、ここにも西洋的・近代的な要素を見ることが出来る。

「跳舞時代」が当時の台湾の都会の世相を反映したものなのか、作詞者の個人的な考えを反映したものなのか、あるいは日本の女性解放運動の影響を受けたものなのかは現時点では明らかではないが、それが当時の台湾人に一定の影響を与え



コロムビア発売「跳舞時代」のレーベル（提供・林太歳<リントアイエイ>）

植民地台湾におけるSPレコードの研究状況
一九三三年といえ、台湾が日本の植民地支配（一八九五―一九四五）を受け始めてから三八年も経った時期である。台湾総督府の政策と教育の方針は、台湾人を日本人として教育し、日本語を使用させることであった。ただし、台湾の在来文化は継続的に存在し、漢文（閩南語読みと客家語読み）による私塾教育はしばらく続いた。また、漢文学の創作、漢文新聞紙の発行は一九三〇年代の後半まで許され、「跳舞時代」も漢文で書かれ、閩南語で歌われた。実際、当時発売されたレコードは流行歌だけではなく、漢民族が好んだ伝統音楽もそれを上回る数で吹き込まれ、発売された。人口の八割を占める漢民族が音楽市場の一番の顧客であることをレコード会社もよく理解していた。日本コロムビアだけでなく、ビクター、タイヘイなどの会社も台湾音楽の制作に参入した。そこに植民地政策とはかけ離れた商業思考を垣間見ることが出来る。

たことは十分に考えることである。なぜなら、流行歌に男女の恋心を歌ったものが多いなかで、こうした「新しい」ライフスタイルを謳歌した流行歌も見受けられるからである。このような流行歌としては、他に「珈琲！珈琲！」「啖加啦將」（ハイカラちゃん）などがある。

筆者らの研究が進むにつれ、台湾の流行歌ブーム以前に、上海の流行歌「毛毛雨」や日本の歌謡曲「草津節」の台湾版が発売されていたことがわかってきた。つまり、台湾の流行歌は上海と日本の影響をすでに受けていたということである。しかしながら、その影響がどの程度のものであり、台湾の在来音楽にどのような変容をもたらしたのかという点に関しては、更なる研究が必要である。本研究では今後、音楽学、文学、マスメディア論、社会学といった多様な視点を、レコード音楽に見られる近代の要素を明らかにし、日本のレコード産業がもたらした異なる地域間の音楽文化の交差と変容の実態を明確にしていく予定である。

共同研究

「音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に」
代表・劉麟玉
2011年10月〜2015年3月



台湾で発売された日本のレコード会社のレーベル（提供・林太歳）
上：コロムビア
左上：ビクター
左下：タイヘイ

しかし、二二世紀に入った今もまだ、当時のレコード産業に関する歴史的研究は積極的におこなわれていない。戦後の国民党政府が、台湾人が日本時代を顧みることを恐れて言論統制をおこなったため、一九九〇年代まで植民地時代の歴史を客観的に研究することが困難であったことがその一因と考えられるが、大衆文化の研究が重要視されてこなかったこともその理由のひとつとして挙げられる。恐らくそのために、SPレコードを含む資料の保存・研究がかなり遅れてしまっているというのが現状なのだろうか。しかしながら、音楽は庶民の生活の重要な側面であり、複雑な要素が絡み合っているはずである。

無料ゾーンが拡大！本館2階の中央
パティオを囲む回廊がインフォーマー
ション・ゾーンとして3月15日に生ま
れ変わりました。「学習コーナー」は
「探究ひろば」に変わり、みんぱくの
研究活動や展示をよりよく知ることが
できるようになりました。ヨーロッパ
展示もパンを紹介するコーナーなど
もつけ、リニューアルしました。新しい
みんぱくをぜひ体感してください。

特別展

『今和次郎 採集講義——考現学の今』
今和次郎が関東大震災後に始めた考現学は、
世相を野外観察、記録して庶民の生活文化の
変化をとらえる学問で、民族学とよく似てい
ます。この特別展は、工学院大学図書館所蔵
の今和次郎コレクションに基づいて青森県立
美術館とバナソニック・汐留ミュージアムで
開催された展示に加え、新しい手法も取り入
れたみんぱくの考現学的な資料や研究を紹
介し、モノと生活文化の関わりを考えます。
会期 4月26日(木)～6月19日(火)



銀座のカフェー服装採集1
(今和次郎・吉田謙吉、1926年)
工学院大学図書館所蔵

◆関連イベント
「みんぱくで考現学的パワースポットを
探そう」
日時 5月6日(日) 10時30分～12時
(受付10時開始)
場所 ナビひろばほか
※参加無料、申込不要
※小学2年生以下は保護者同伴で参加可能。
お問い合わせ先
情報企画課 展示グループ
電話 06・6878・8532

◆みんぱくセミナー
左のページをご覧ください。

◆みんぱくウィークエンド・サロン
特別展開催中は特別展開連のお話をお届け
します。詳細は本誌24ページをご覧ください。
その他イベントが続きます。お楽しみに！
みんぱく春の遠足・校外学習 事前見学&
ガイダンス
実施日 4月3日(火) 4月5日(木)
4月6日(金)
時間 14時～17時
場所 第5セミナー室ほか
参加申込方法
みんぱくホームページから参加申込書をタウ
ンロードし、必要事項を記入の上、FAXに
てお申し込みください。
お問い合わせ先
広報企画室 広報係
電話 06・6878・8560

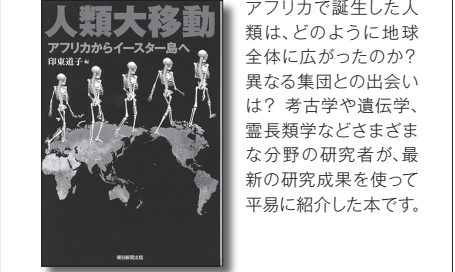
◆みんぱく映画会/みんぱくワールドシネマ
「僕たちは世界を変えることができない。
But, we wanna build a school in Cambodia.」
日時 5月12日(土) 13時30分～16時30分
(開場13時)
場所 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

●みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)
新規メンバー募集
みんぱくミュージアムパートナーズは、みん
ぱくとのコラボレーションのもと、博物館活
動のサポートのために自主的な企画運営を行
う市民パートナーです。現在、9月から活動
する新しい仲間を募集中です。
応募期間 5月10日(木)まで(先着50名)
お問い合わせ先
みんぱくミュージアムパートナーズ事務局
新規募集係(国立民族学博物館 社会連携室内)
E-mail mmp-jimukyoku@idc.
rinpaku.ac.jp
FAX 06・6878・8256

●無料観覧日のお知らせ
5月5日(土・祝)のごどもの日、特別展
本館展示を無料で観覧いただけます。ただし
自然文化園(有料区域)を通行される場合
は、入園料が必要です。
*電話でのお問い合わせの受付時間は9時から
17時(土日祝を除く)です。

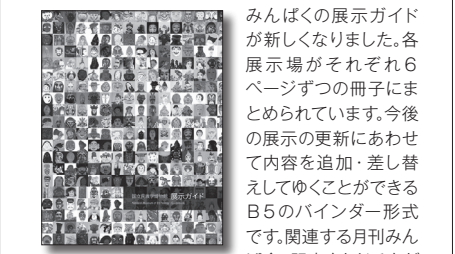
刊行物紹介

■印東道子 編著
『人類大移動
——アフリカからイースター島へ』
朝日新聞出版 定価：1,470円



アフリカで誕生した人
類は、どのように地球
全体に広がったのか？
異なる集団との出会
いは？考古学や遺伝学、
霊長類学などさまざま
な分野の研究者が、最
新の研究成果を使って
平易に紹介した本です。

■『国立民族学博物館 展示ガイド』
国立民族学博物館 定価：1,200円



みんぱくの展示ガイド
が新しくなりました。各
展示場がそれぞれ6
ページずつの冊子にま
とめられています。今
後の展示の更新にあ
わせて内容を追加・差
し替えてゆくことが
できるB5のバインダー
形式です。関連する
月刊みんぱくの記事
をとじるなど、使
い方はあなた次第！

■『民博通信』2011 No.135(12月発行)
評論・展望
東日本大震災における
被災文化財の救援の現場から
——有形民俗文化財の支援を中心に
日高真吾

みんぱく出版物入手方法については広報係にお問
合わせください。 電話 06・6878・8560

みんぱくセミナー

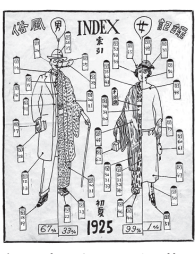
会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)
第407回 4月21日(土)
サハリンのキムチ
講師 朝倉敏夫(国立民族学博物館教授)



家庭でキムチを作る
サハリン韓人

かつて樺太とよれたサハ
リンには数万人の朝鮮半
島出身者がいます。彼ら
はどうしてサハリンに渡
つたのでしょうか。そし
てどのように暮らしてい
るのでしょうか。彼らの
民族食であるキムチを
通して、その歴史と生
活についてお話し
します。

第408回 5月19日(土)
特別展開連
今和次郎 採集講義と日常生活文化研究の現在
講師 萩原正三(工学院大学 名誉教授)、佐藤浩司
(国立民族学博物館 准教授)、黒石いずみ(青山学院
大学 教授)、横川公子(武庫川女子大学 教授)



東京銀座街風俗統計図索引(今
和次郎、1926年)工学院大学図書
館所蔵 立休模型(制作:NET
design (OHONO), 2011年)

特別展に展示されている
今和次郎のスケッチは、大
正・昭和期の人々の普段の
暮らしを生き生きと伝え
ます。また、その日常生活
の細かな観察を記録し新
たな視点で魅力や問題を
探る方法には誰もが目を
開かれます。今和次郎
が民家研究や考現学で追
求した事柄はいったい何
だったのか、それが現代に
どのような意味を持つのか
を解き明かします。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)
第407回 5月5日(土) 14時～15時
特別展開連
「特別展開連」
考現学と民族学
講師 久保正敏(国立民族学博物館 教授)
生活文化の変化を捉えるために「現在」を徹底的に観
察・記録する考現学は、民族学と極めて近い学問です。
梅棹忠夫も考現学の手法に大いに刺激を受けているほ
か、現在の民博の研究者にもその精神は受け継がれて
います。今和次郎の編み出した手法の極意とその後の
展開を紹介します。
第408回 6月2日(土) 14時～15時
特別展開連
タイムカプセルとしての民家模型
講師 久保正敏(国立民族学博物館 教授)

東京講演会

第101回 4月15日(日) 14時～15時
ビデオトークより
「ペー族の映像民族誌——制作過程で考えること」
講師 横山廣子(国立民族学博物館 准教授)
映像では、モノでは表現することのできない人びとの生
活の雰囲気を描き出し、祭りや儀礼などを一連の流れの
なかで伝えることができます。制作中のペー族のマルチ
メディア番組「雲南省のペー族の暮らしと文化」の映像
を用いて、彼らの生活を紹介します。番組制作の意図、
映像として表現する上での工夫や編集における悩みや工
夫についてお話しします。
会場 モンベル渋谷店5Fサロン
定員 50名(要申込)
第102回 6月9日(土) 14時～15時
貨幣経済を問う視点
講師 小林繁樹(国立民族学博物館 教授)
会場 江戸東京博物館学習室
定員 70名(要申込)

国立民族学博物館
ミュージアム・
ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
<http://www.senri-f.or.jp/shop/>

幸せを呼ぶ「エケコ人形」

今回ご紹介するのは、ポリビア、ペルーなどアンデス
高地の先住民のあいだで大切にされているエケコ人形。
糸で編んだ帽子をかぶり、太った体のまわりに豆や
パスタの袋、焼き物の壺、人形や楽器、ドルやペソの
お札など、さまざまなもののミニチュアをぶら下げた、
口髭をはやした男性の人形です。
本来は裸の人形に自分たちが欲しいもの、食料品や身
の回り品、お札(現金)など日常不足して困るもの、
あるいは住宅や車など、近い将来手に入れたいもの
のミニチュアを飾りつけます。
ポリビア最大の都市ラパス市では、毎年一月二十四日に
開かれるアラシタの祭りに、自分たちが欲しいものを
身に付けたエケコ人形を持って大聖堂で祝福を受け
れば、その年のうちに願いがかなうと信じられています。



エケコ人形 (大) 1,890円(税込)
(小) 1,470円(税込)

動物園に動物園を見に行く 新竹市立動物園

木下直之 東京大学教授



「ミュージアム」といえば、何をイメージするだろう。

美術館や博物館だけではない、これから紹介する動物園や水族館も、

じつは「ミュージアム」のひとつである。

動物の生態や生活環境も、時代を反映して変化する。

つまり、動物園は人が生き物を介し、自らが生み出す「文化」を顧みる場所でもあるのだ。

自らの歴史に向き合う

日本動物園水族館協会の創立は一九四〇年にさかのぼる。当初の会員は一九園におよび、そのなかには、今なら「日本」ではない台北市動物園と李王職 昌慶苑が含まれる。前者は一九八七年に、後者は八四年に、それぞれ郊外に移転し、台北市立動物園、ソウル動物園として活動を続けてきた。台湾では、新竹にも一九三六年に児童遊樂場が開園し、園内で動物を飼育展示していたが、協会に参画しなかつたのは規模が小さく、動物園を名乗っていなかつたからだろう。現在の新竹市立動物園である。

さらに、上野動物園に伝わる「我邦ノ動物園一覽表」(一九三〇年作成)には、「我邦」ではないはずなのに、関東庁博物館附属動物園が記されている。旅順にあったこの動物園は、関東庁博物館附属施設として一九一四年に設置され、三二年からは旅順博物館附属動物園となった。満州国建設後は、新竹にも動物園がつくられた。上野動物園園長の古賀忠道が指導し、仙台市動物園園長の中俣充志が職員を伴って渡満し、新京動植物園の園長に就任した。当時の日本の動物園では実現が困難であった無柵式の動物展示を新天地で目指したという。前者は現在の旅順博物館区に、後者は長春動植物公園につながっている。

これらかつての「日本」の動物園のなかから、新竹市立動物園をご案内しよう。新竹は台北から南西六〇キロメートルに位置し、一丁関連企業が集まっているため「台湾のシリコンバレー」とよばれる人口四〇万人ほどの活気ある都市だ。飼育動物はおよそ二〇〇種、地方都市の小さな動物園にすぎず、展示デザインも古く、およそ四〇〇種の動物を飼育展示する台北市立動物園とは比較にならない。それをあえて本欄で紹介するのは、今なお「日本」の面影を留め、それらを払拭せずに、自らの歴史と向き合う姿勢に感銘を受けたからだ。

正門は開園当時のままで、ふたつの門柱から二頭のゾウが鼻と牙を突き出している。柱の上にはライオンが向き合って座る。このデザインは、門だけであつたかもしれないが、当時世界の最先端にあつたハンブルクのハーゲンバック動物園のそれをモデルにしたことがわかる。ちなみにゾウが顔を出した門は、一九三三年に開園した福岡市立動植物園にも採用されており、閉園後も門だけは残り、福岡市立馬出小学校の一角に見ることができ。

動物園は文化施設

さて、新竹市立動物園の園内では、鳥を飼ういくつかのケージに、つぎのような札が掛かつていた。つわく「歴史動物籠舎、Historic Animal Cage built in 1936」、つわく「動物園文化資産、Culture Resource of Hsinchu Zoo」。

動物園を訪れて、展示された動物ではなく、展示装置たるケージや飼育舎にその歴史の説明を自にする機会はわたしの経験ではほとんどない。わずかに上野動物園のサル山(一九三三年建設、ロンドン動物園の旧ペンギンプール(三四年建設)や旧ゾウ舎(六五年建設)が思い浮かぶくらいだ。上野動物園のそれは単なる歴史の説明だが、ロンドン動物園ではHeritageというタイトルを掲げていた。しかし、新竹の「動物園文化資産」はさらに踏み込んでいる。そこで事務所に尋ねると、園長自らの発案だという。

一般に、動物園というミュージアムは、生き物を展示するだけに日々の飼育に追われて、過去を振り返る姿勢に欠ける。そのうえ展示理念は時代とともに変わり、近年では動物の福祉が重視される。それゆえに展示スタイルと施設は日進月歩であり、古びればいとも簡単に壊され歴史を残さない。動物園は野生動物という「自然」にふれる場所であり、「文化」とは無縁だという誤解が蔓延している。しかし、動物園はまぎれもない文化施設であり、一方、近年では展示動物として家畜が注目されており、動物を含めて、動物園における文化遺産、文化資源を考えるとときがきている。そんなことを、新竹の動物園で思った。

民博の文化資源研究センター、そしてわたしの所属する東京大学文化資源学研究室が共に用いる Cultural Resource 近似した Culture Resource、思いがけなくこうで出くわしたことになる。



新竹市立動物園 鳥ケージ



新竹市立動物園 正門



昌慶苑動物園(当時の絵はがき)



旧福岡市立動植物園 正門



旧新竹神社石燈籠



新竹市立動物園 オランウータン放飼場

ボクシングの文化論 3の1

ボククス！

榎永真佐夫 民博研究戦略センター

筆者が東南アジアの村落で現地調査するようになったわけをたどっていくと、拳闘への関心にたどりつく。二〇代のころ、ボクサーのリスミカルなパンチの連打、ムエタイ選手のムチのようにしなるキックに魅せられたものだ。

拳闘の代表は、やはりボクシング。試合場に行ってみよう。四角い「輪」のなかで、紳士が一人、手袋をはめた裸の男たちに「箱！」と声をあげている。冷静に考えてみると、謎めいているではないか。いざボクシングの文化論へ、「ボククス！」

四角いのに、輪

レフェリーが二人のボクサーのあいだに入り、声をあげる。

「ボククス！」

ボクシングは、ボククスするスポーツである。だが、ボククスとはなんだろう。

じつはわたしは長いあいだ、このボククスを、箱の意味だと勝手に思い込んでいた。『あしたのジョー』（高森朝雄・ちばてつや）のなかでも、リングは、血なまぐさい闘争が繰り広げられる弱肉強食の「四角いジャングル」にたとえられている。ジャングルに対するイメージがどうかはともかく、なるほどリングは、闘士たちを閉じ込めた四角い箱（ボククス）に見える。そんな

古代ギリシャの壺絵に描かれた拳闘（ノルベルト・エリアス、エリック・ダニング 1995『スポーツと文明化—興奮の探求』法政大学出版局）



ルが成文化された。近代ボクシングの誕生をうかがわせる出来事だ。ブローtons・コードには、勝敗、審判の役割、反則などを定めているが、試合場に関する規定はない。成文化したジャック・ブローton（一七〇三—一七八九）自身も、しばしば円形拳闘場で試合していた。四角いリングについての規定ができるのは、一九世紀後半である。

「さあ、殴りあえ！」

ボククスの話に戻ろう。

一九世紀まで、拳闘はイギリスで一般的にピュリズムといわれていた。一〇〇年も前にイギリスで出版されたボクシング史の古典『ピュリズティカ』によると、ピュグズは殴ることを意味する古代ギリシア語である。じつは、ボククスという語も、同じピュグズが訛ったものだ。そのむかし、オリンピアの祭典で拳闘家たちは牛革を拳に巻いて四角くしばって固めていた。この拳が箱にたとえられたことから、ボククス（殴る／箱）は拳闘との結びつきを深め、ボクシングという英語が広まった。フランス語でも「ボククスする」だ。

そう、現在でもレフェリーは選手たちに、「箱！」と叫んでいるのでない。「さあ、殴りあえ！」と命じているのだ。

箱のなかに箱、また箱……

この際、ボクシングにある箱からもっと妄想しよう。ボクシングのなかにある箱とは、まず古代拳闘家の拳だった。現在ではバンテージ（包帯）で手首からしっかり拳を固定し、拳を握った形に最初からできているグローブに、両手を差し込むのである。まさに箱っぽく進化したのだ。

このグローブをひもでしばって腕に固定すると、肘から拳までが一本のこん棒のようになる。「こんな硬いのでなくったら、きくだろうな」と感心するが、「こんなのでブンなぐられるのか」と冷や汗も出る。自分で着脱できないから、トイレにもいけない。鼻をかむのも一苦労だ。両手の先にくいこみそうにくっついてい

ところが、わたしの思い込みのはじまりだったかもしれない。しかし、わたしたちがふつう知っているボクシング・リング、あのロープがはられた四角いステージは比較的新しい。だいたい四角いのにリング（輪）だなんて、おかしいではないか。

今日のボクシングにつらなる拳闘の歴史をひもといてみよう。エジプトの壁画から、紀元前三〇〇〇年までさかのぼるともいう。古代オリンピックに限っても、拳闘競技は第三回大会（前六八八年）からローマ帝国期の四世紀末に祭典が中止されるまで、一〇〇〇年以上も続いた。そのころ四角いステージはない。丸い闘技場のなかには、ロープもなかった。

それから一八世紀まで下って、イギリスにおける話。拳でも棒でも剣でもなんでも来いの豪腕格闘家がいる、格闘技学校を作り、拳闘初代チャンピオンを名乗った。ジェームズ・フィッグ（一六八一—一七四三）である。観衆たちが、ロープの丸い輪を手でひいて張ったなかから、フィッグは「誰か、やれんのかあ！」と挑発した。これがリングの由来だとか。

このフィッグが没した一七四三年に、「ブローtonズ・コード」として拳闘ル



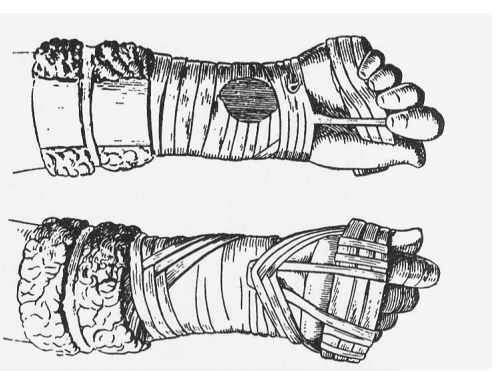
ジョージ・A・ヘイズ『素手拳闘（ベアナックル）』1870-1885年。この時期に、スポーツボクシングが急速に整備されていくが、円形リングもまだあった。（カシア・ボディ 2011『ボクシングの文化史』東洋書林）

たつの固い箱は、両拳を拳闘の道具にかえる。同時に、次の行き先がリングという箱以外にないことを宣告するのだ。ボクサーは観客の視線が集まるその箱に向かって、自ら階段をあがる。厳しいトレーニングで無駄なぜい肉をそぎ落としたボクサーの身体も、あたかも力と熱情を濃縮して閉じ込めた、一個の箱のようである。対戦者は、体重も同じ、試合までの禁欲も同じ、勝利に対する執念も同じ、自分の鏡像みたいな、もうひとつの箱である。二人は自らの箱を開放しあい、殴りあうのだ。だから、レフェリーは試合中、何度も命じる。

「ボククス！」

パンドラの箱

しかし、ボククスしすぎることの身体への危険性は、何十年にもわたって問題になってきた。特に頭部への打撃による障害が懸念されるからである。いわゆるパンドラカーになる危険性である。このことばを日本で有名にしたのも『あしたのジョー』ではなからうか。わたしなどは、チャンピオン、ホセ・メンドーサのコークスクリューパンチや、漫画の展開を思い出して胸が熱くなる。さて、このパンドラカーは、ボクサーたちのあいだでパンドラと略されている。パンドラの箱があげられてしまったとき、本人にも、家族にも、あらゆる災いがふりかかると。最後に箱に残っているのは、ほんとうに希望なのだろうか。恐ろしい冗談である。ボクサーたちは、内側が鏡はりの箱みたいなジムのなかで、決して自己愛にひたっているだけではないのだ。



古代ギリシャの拳闘家の拳は、革紐でしばって固められた（ノルベルト・エリアス、エリック・ダニング 1995『スポーツと文明化—興奮の探求』法政大学出版局）

買い物で世界とコンシヤスにつながる

わたしたちが日常、身につけ口にする品々のほとんどは、目に見えぬ海外の生産者の力によるものであることが多い。より安全で、より信頼できる商品を手にするには、その作り手たちの文化や生活に思いを馳せ、意識的に理解することも重要なだろう。生産者と消費者、異なる文化を「商品」を通じてつなぐ人びとの活動を紹介する。

シサム工房は、設立以来、一貫してフェアトレード商品の販売を活動の要としている。「シサム」はアイヌ語で「隣人」の意味がある。アジア五カ国のNGOと日々やり取りを重ね、衣料やアクセサリーから、ランプシェードなどのインテリア品までのオリジナル商品を数多く生産し、販売している。

一九九九年の春、京都の小さなショップから始まったわたしたちも、現在では直営店が六店舗、全国に卸販売もし、順調に販売規模を拡大している。このことは、一般の消費者がフェアトレードに触れる機会創出として大変大きな意味をもっている。

この広がり要因としては、フェアトレードへの理解と関心が徐々に浸透していること。また、一般消費者のナチュラル志向や、「もの」より「こと」に重点を置く消費行動の転換が挙げられる。

「三つのこだわり」

シサム工房には、「三つのこだわり」という事業コンセプトがある。

第一にフェアトレードによって途上国支援をおこなうこと。シサム工房の事業の根幹は、日々の流通

の変化やフェアトレードの現場の状況を調査し、社内外に情報開示するのもこの部署の重要な役割である。

春夏秋冬とフルで商品を作ってもらっているネパールの生産者との関係は特に深いものがある。大きく二種類の商品があり、ひとつは手編み物、もうひとつが手織り生地の女性服である。どちらも売上に占める比率は高く、相手NGOにとってもシサム工房は有力な取引先であり、お互いになくてはならない大切なパートナーとなっている。

今どき、手編みのセーターを大量販売している大手メーカーはないだろう。均質を当然とする日本の厳しいマーケットで大量に捌くことはとてもできないからだろう。街では化学繊維の機械編み製品ばかりが目につく。

しかし、シサム工房では、手編みアイテムを、フェアトレードにとって欠かすことのない商品群と位置づけている。ネパールの女性たちが、自宅で子どもの世話や家事をしながら、編み棒二本という最小の道具で現金が得られるのだ。

「シサム工房の新しいデザインや新しい編み模様に挑戦するのが毎回楽しい学び」と嬉しい声を聞かせてくれるのも、我々の励みになっている。サイズや色のばらつきなどは、日本で販売する我々にとって、常に大きなチャレンジであるが、機械には出せない味わいや、商品の背景にある助け合いの気持ちなどが、それを凌駕する魅力としてあると思う。

例えば、今後、会社の規模が急激に大きくなり、取扱量を急増したくても、わたしたちはそれを理由に生産者を取り換えることも、機械編みに転換することもないだろう。あくまでも、仕事を必要として

で生産者の生活改善を目指すことにある。第二に伝統文化、特に手仕事に敬意を払うこと。現地の伝統技術や高度な手仕事の技術を、製品作りに活かすことで、文化や技術を継承する道を創出している。また、販売の際、我々が敬意をもってその文化を紹介することで、日本の消費者にも、「貧しい人の生活資金作りを支える商品」だけではなく、「素晴らしい文化や技術が込められた商品」としても認知されることを目指している。第三は環境や健康へのこだわり。生産にあたり、草木染めなど、環境に配慮した技術や原料を使用するようにしている。

アジアの生産者とシサム工房

シサム工房には、商品部というデザインや、生産管理をする専門の部署がある。わたしたちの生産パートナーである現地フェアトレードNGOと日常的にやり取りをし、年に何度も生産現場に赴き、商品を完成させ、それが日本の店頭で並ぶまでのすべての作業を担当している。スタッフたちは相手の状況を「慮り、心のこもったやり取りを心がけ、日々生産者と向き合っている。商品作りだけでなく、生産者の暮らし

いる女性たちの数を訓練とともに徐々に増やし、彼らの生活の改善に本当に貢献する仕事内容を拡大していくのだ。

それは、わたしたちの目的が、「貧しい国」に「より多くの現金を落とすこと」ではなく、「その仕事を必要とする、より多くの人」に、顔が見える形で、「仕事という生活の手段を提供すること」だからだ。我々が必ず、生産者一人ひとりの状況を把握する草の根レベルの現地NGOにあいだに入ってもらおうのは、そのためである。

お買い物は投票

現在、世界とのつながりなしで生きている人はいないだろう。朝飲むコーヒーも、夜眠る布団のコットンも、ほぼ間違いなく海外からやってくる。知ってか知らずか、自分のお金が海外に影響を与えているのだ。こうしたグローバル社会では、最悪の場合、身近なチョコレートを買っただけで、海外の児童労働に自分のお金が流れてしまう危険もある。加害者も被害者も生まれない、おいしくて安心なフェアトレードチョコを推進するのはこのためである。

しかし、現在のフェアトレード商品は、人が一生に使うすべてのものを網羅しているわけではない。だからこそ一番大切なのは、「お買物とはどんな社会に一票を投じるか(What you buy is what you vote)」という考え方のだ。シサム工房はこれをスローガンとし、買い物の世界におよぼす影響にわたしたち一人ひとりをもっとコンシヤスになって、社会に貢献できるお金の使い方、物選びをする「意識そのもの」を広げていきたいと願っている。



カトマンズ市内から程近い農村の様子



シサムとNGO、双方のデザイナーが相談しながら服のパターンを修正する



稲刈りが終わったばかりの村では、そこらじゅうで見られる光景



染め工房。注文どおりの色に染めていく



コレクションのサンプルを縫っているところ



ネパールのフェアトレードNGO内の託児所

「幸せの国」のあやうさ

みなみ まさき と
南 真木人 民博 文化資源研究センター

「幸せ」と併存する難民問題

昨年一月、ブータンのワンチュク国王と新婚のペマ王妃が国賓として来日し、そのさわやかな印象が「幸せの国」ブータンということばとともに日本中を駆けぬけた。折しも、わたしたちは、東日本大震災を経験して明るくニュー

スに飢えていたし、これまでの生活の何かが間違っていたのではないかと問い始めたときでもあった。礼節と伝統をおもんばかる両氏の言動や精神的な豊かさを求めるブータンのGNH(国民総幸福)の考え方に、つよく惹きつけられた。マスコミも癒しの効果と現代文明をやわらかく批判する効用に期待してか、二人の来日を心温まるニュースとして報道し、ブータン熱を駆りた

もとより、ロイヤル・ウェディングと事実上の新婚旅行という慶事に水をさすつもりはない。だが、この世に「幸せ」だけの国などあるのだろうか。ブータンを語る時、忘れてならないのは「幸せ」と併存する影の部分だ。それは、ブータンの伝統と主権、独立を守るためとなされてきた異民族の同化政策とその結果としてのブータン難民問題である。市民権法の改定により、多くのネパール系住民の居住が非合法とされて弾圧を受け、一九九〇年ごろから大挙してネパールに流出し



ブータン難民キャンプのサッカー大会(2003年)

た。国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)によれば、その数は約二万人にのぼる(ブータンの人口は約七〇万人)。ネパール政府とUNHCRは、難民の本国帰還をブータン政府に要求してきたが、現在にいたるまで認められていない。

「幸せの国」に求められるもの

難民キャンプができて二七年が経った二〇〇七年、UNHCRなどの献身的な努力により「第三国定住」プログラムが始まった。アメリカやカナダ、オーストラリアなど八カ国が人道的配慮から、長期化するブータン難民の受け入れに応じ、二〇一二年までに五万人の難民が第三国に旅立ったのだ。史上、最大規模といわれる第三国定住がブータン難民を対象に実施され、今なお六万人の難民がキャンプで次の機会を待っていることは、もっと知られてよいだろう。五万人中、四万二〇〇〇人のブータン難民をアメリカが引き受けたことも賞賛に価する。

「幸せの国」は、異民族を排除し、国内に残るマイノリティが自由に意思表明できない状況のもとで成り立つという、あやうさを併せもつようだ。ブータンを、そしてGNHという哲学を、過大にも過小にも評価しない冷静さと中立性が求められている。

みづぼく 私の逸品 砥石入

標本番号 H0014863
地域 長野県諏訪郡北山村柏原（現・茅野市内）
受入年 1975年
特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」にて展示中

民博 民族文化研究部

近藤 雅樹

この砥石入は、昭和三年二月に今和次郎が採集した資料である。附表には、採集地が「長野県諏訪郡北山村柏原」（現在の茅野市内）である旨の記述がある。また、備考欄に「ぼろ布にて編む」とあるように、稲わらに細く裂いた布切れを縷いこんで堅牢なつくりをしている。山仕事に出かけるときなどに、腰に提げて持参した。砥石入だが、この資料には砥石が入っていない。早くから渋沢敬三と親交があった今が、渋沢が主宰するアチック・ミューゼアムの民具研究に協力するため、調査旅行先からもち帰った資料のひとつである。

今和次郎（一八八八—一九七三）は青森県弘前市に生まれた。東京美術学校（現在の東京芸術大学）を卒業し、早稲田大学で建築学を教授するとともに、建築設計にも携わった。民俗学者の柳田國男らが組織した民家研究会「白茅会」の活動に参加したことを機に、民家研究に着手して重要な足跡を残した。画技にすぐれ、その力量を民家研究や考現学調査に活かして数多くのスケッチを残している。

考現学は、今が提唱した「現在」を研究対象化しようとする学問・思想である。昭和初期の急速に大都市化していく東京の街の様子や、人びとの生活の変化を採集（観察・記録）し、その分析をめざした。

建築家としての活動には、関東大震災直後の街頭に急ごしらえのバラック建築をペンキで装飾した「バラック装飾社」や、積雪地方のくらしを快適にするための試験家屋の試み、村の共同作業場の設計、小住宅の設計などに携わった。第二次世界大戦後は、日常生活を考察する生活学や服装研究といった新しい学問領域にも関心を深めて展開していった。こうした幅広い領域にわたる活動の根底には、くらしの営みを「ひろい心でよくみる」ことによって、同時代人とともにくらしのかたちを創造しようと模索し続けたまなざしと共感があった。





被災後を生きる

たけざわ しょういちろう
竹沢 尚一郎
民博 先端人類科学研究部

地域社会が避難所のあり方をきめる

岩手県大槌町吉里吉里は、東日本大震災で多くの被害を出した地域のひとつである。全家屋の半数が津波に流され、二カ所の避難所には最大で八〇〇人以上の被災者が暮らしていた。そこに木製の組み立て式間仕切りが送られてきた。プライバシーのない生活を改善しようとの配慮によるもので、阪神・淡路大震災時には重宝されたという。しかし、吉里吉里では不要だといって、共同風呂の炊きつけにして燃やしてしまった。

このエピソードが示唆するところは大きく、被災者の要望は地域によって異なるのだから一律に判断を下すのではなく、各地域の実情を重視しなくてはならない。そのためには、地域に即した詳細な調査が何より必要なことを示しているのだ。

被災直後、吉里吉里では住民総出で対策本部を立ち上げ、被災家屋を一軒一軒まわり、ガレキの下敷きになっている人びとの救出にあたったという。その後、一台だけ残ったシヨベルカーでガレキの撤去をおこない、それが入らないところでは、中学生も加わってロープで引いて

き出しがおこなわれなかったため、避難者は役場が差し入れる弁当で過ごしていた。

災害に強い社会をどのようにしてつくるか

わたしは四月六日から被災地に入り、大槌町や釜石市で住民によるまちづくりを協力しながら、被災後の行動について記録をとった。その過程で、被災後の避難所のあり方に、右のふたつを両極端として、さまざまな形態があったことが確認できた。

こうした違いはなにに由来していたのか。津波後の火災の有無や、人口の違いも理由のひとつだろう。しかしそれより重要なのは、被災前の



集落がほぼ全壊した安渡(あんど)地区では、自衛隊の車両がガレキを撤去して道をつけていた。



全壊した大槌消防署。大槌町では消防署員のほか、多くの消防団員が亡くなった。



民宿の屋上に打ち上げられた大型遊覧船はまゆり号。保存運動にもかかわらず、解体撤去された。



中央公民館から見た大槌町中心部。津波と3日つづいた火災のため、すべての建物が消失した。

ガレキを撤去した。病人やけが人の搬出のためのヘリポートと生活道路の確保が目的であった。

一方、女性たちは被災した商店から流出した商品を集め、当座の飲食に活用する一方で、被災しなかった家をまわって米や食料を確保した。

地域社会のあり方である。人口二二〇〇の吉里吉里地区には、ひとつの小中学校とひとつの寺院、ひとつの神社しかなく、人びとは共同で生活するのに慣れていた。一方、大槌の中心地では神社も学校も複数あり、他所からきた人びとも大勢いて、生活の共同は実現されていなかった。

都市化の進んだ今日、吉里吉里地区のように生活の共同を実現できる場所は希有である。しかし、大槌市街のようであったなら、助かるはずの人命が失われる危険性がある。被災後の死者・行方不明者の割合は、吉里吉里が四パーセントであったのに対し、大槌市街では一二パーセントを超えている。この数字は、被災直

自衛隊の食料供給が本格化したのは三週間後であり、その間、避難者はピンポン玉ほどのおにぎりや朝食の飢えをしのいだという。地元の女性たちによる炊き出しは、避難所が閉鎖される八月まで続いたのだ。

これに対し、おなじ大槌町でも中心部では違っていた。津波の高さが予想を上回ったこともあり、町役場、消防署、図書館、スーパーなどの全施設が崩壊した。避難所までが水に流され、多くの犠牲者を出しただけでなく、火災が三日三晩続いて、すべてが消滅した。

町の中心部の小さな丘には中央公民館が建てられており、そこだけは被災をまぬがれていた。そこに、一時は二〇〇〇人も被災者が避難したのだ。毛布や食料の備蓄はほとんどなく、人びとはカーテン等を破いて暖をとったが、雪の降る寒い夜で、低体温で亡くなる人があついでという。この避難所では、役場の人間が多数避難していたにもかかわらず、避難民による対策本部は立ち上がらなかった。カーテンやスペースをめぐる住民はいがみ合い、喧嘩や怒号が生じることもたびたびあった。しかも、炊

後の初動の大切さと、地域住民の結束の重要性を裏づけているのではない。東日本大震災後には、調査が被災者の心理的肉体的負担を増大しかねないという「調査被害」の観念が過度に強調されて、調査自粛の要請があつた。むしろ、被災者の心を斟酌しない一方的な調査は論外である。しかし、地域に即した詳細な調査が実施されなければ、不利益をこうむるのは被災者であり、今後災害を被る可能性のあるわたしたちである。

自然災害に対して強い社会をつくるには、どうすべきか。調査と分析の継続がなにより必要なはずだ。

4月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

1日

(1100日)

話者：須藤健一（国立民族学博物館長）
話題：織りと樹皮布づくり
場所：本館展示場内ナビひろば

8日

(1100日)

話者：ピーター・マシウス（国立民族学博物館 准教授）
話題：民族植物学の旅：くらしの中のはっぱ
場所：本館展示場内ナビひろば ※通訳あり

15日

(1100日)

話者：西尾哲夫（国立民族学博物館 教授）
話題：新生アラビア語が生んだ“フェイスブック革命”
場所：本館展示場内ナビひろば

22日

(1100日)

話者：菅瀬晶子（国立民族学博物館 助教）
話題：邪視とカメレオン——東地中海地域の俗信
場所：本館展示場内ナビひろば

29日

(1100日)

話者：飯田卓（国立民族学博物館 准教授）
話題：【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】
デジカメとパソコンで考現学
場所：特別展示館

1年間みんなくは何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

本号は特集テーマとして4月26日から開催される特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」にちなみ、考現学をとりあげた。前号3月号では、おもに失われたものの復興・再現・復元がテーマであったが、今回は現在、そこ、ここにある日常をいかに記録し、また保存するかということになる。未来を見据えたうえで、現状を記述した展示するという点で、民博の使命の一翼になう博物館活動の原点にたちもどることにもなる。

本号から「連載リレー 知の収蔵庫」「異聞逸聞」があらたにはじまった。前者は民博の研究者を中心に、自己の研究から広がり、つながっていく視野と関心の世界について執筆者それぞれに3回連続で語ってもらう。研究者の、普段の研究からは見えにくい、いわば舞台裏にまで踏み込んだものになることを期待している。後者では、研究者が、一般にはほとんど知られない事実や誤って伝えられている事柄に関して、フィールドで接した情報や体験からのべる。いずれも民博ならではの、というコーナーになれば幸いである。ご意見、ご要望など歓迎します。(庄司博史)

●表紙：モンゴル国アルハンガイ省、春營地にて。2011年5月 撮影：堀田あゆみ
現代の遊牧民が暮らすゲルには、ソーラーパネル、パラボランテナが。家族そろっての遠出には、バイクが大活躍。1944年、現・張家口市に置かれた西北研究所（所長：今西錦司）を拠点に、梅棹忠夫らは内モンゴルを調査した。当時の調査記録と比較すると、モンゴル生活文化における不易と変化が見えてくる。これも考現学である。

次の予告

特集

博物館と博情報（仮）

月刊みんなく 2012年4月号

第36巻第4号通巻第415号 2012年4月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂

編集委員 庄司博史（編集長） 樫永真佐夫 川口幸也

久保正敏 菅瀬晶子 中牧弘允 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一欽

制作・協力 財団法人 千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

